

「保育実践力評価スタンダード」

観 点 \ 段 階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
A．保育計画力			
1．幼児との信頼関係の構築	子どもにネガティブな感情を抱かせない関係でいられる。	子どもと自然な形でかかわることができる。	子どもが積極的にかかわりたいと思える存在でいられる。
2．幼児の理解	子どもの行動に対して興味・関心を持って見ようとする姿勢がある。	子どもの行動から、その子どもの内面を推し量り、それを踏まえてかかわろうとする姿勢がある。	保育者とのかかわり方との関係で、子どもの行動や心の動きを理解しようとする姿勢がある。
3．ねらいや内容の設定	保育のねらいを子どもの興味や関心の観点から捉えて設定している。	保育のねらいを子どもの生活や遊びのへの取り組み方の変化、教師や友だちとの人間関係の変化、自然や季節の変化など、生活の実態を把握した上で設定している。	保育のねらいを子どもの生活の実態を把握し、幼児の生活全体として連続性をもって展開されることを配慮して設定されている。
4．環境の構成	子どもが展開する具体的な活動に最低限必要な環境を構成している。	子どもの発達、興味や関心の対象、意欲の程度、気分の状態、これまでの経験などを考慮して、子どもが主体的にかかわれる環境を構成している。	子どもが発達に必要な経験をすることができ、望ましい発達を実現させることができる環境を構成している。
5．指導計画			
1) 指導計画作成	子どもの興味や関心に沿った計画を設定しようとしている。	家庭や地域の子どもの生活経験や発達の姿を捉えて、子どもに必要な経験を配慮した計画を設定しようとしている。	地域の自然環境や近隣の人々との触れ合いの機会、行事などをよく知り、地域や家庭との連携を深める機会を位置づけながら計画を設定しようとしている。
2) 保育指導案の作成	保育指導案の一般的な形式項目を理解し、記述することができる。	幼児の姿、ねらい、内容、環境の構成、予想される子どもの活動、保育者の援助、を区分して記述することができる。	記述内容に、保育者独自の創意、工夫がみられる。
3) 保育評価	自らの保育に対して、良かった点、良くなかった点を明確に指摘することができる。	自らの保育に対して、保育者としてのかかわり方は適切であったか、環境の構成はふさわしいものであったか、あらかじめ設定した指導の具体的なねらいや内容は妥当なものであったか、といった具体的な観点から反省評価できる。	自らの保育に対する反省・評価をもとにして、今後の自らの保育を具体的に改善していこうとする努力がみられる。
B．保育展開力			
1．話し方			
1) 発声	- 適切な声の大きさと話している。 - 明瞭な発音で話している。	- 話す内容に応じて適切な速さで話している。 - 無理のない発声で話している。	- 緩急・強弱等の抑揚をつけて話している。 - 全体へのことばがけと個へのことばがけが適切に使い分けられている。

観 点 \ 段 階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
2) 話法 説明	子どもにわかりやすいことばづかいをしている。	・具体例が適切に用いられている。 ・子どもに主旨がわかりやすいように、結論を先に出して後で説明する方法などが適宜とられている。	・話だして子どもの興味をひく工夫がなされている。 ・目的や意味を明確にしなが、説明手順が工夫されている。
助言	・助言の必要性を子どもの遊び場面の中で判断し実行している。 ・子どもに対して簡潔ではげます言葉使いになっている。	・子どもの動きや願いを具体的に示唆している。 ・個への助言とクラス全体への助言が区別され実践されている。	・子どもの実態をふまえ、子どもにとって実行可能な適切な助言になっている。 ・子どもの成長や学びの深まりについて長期的な展望を持ち助言の方法を変えている。
読み聞かせ	声が明瞭で速さが適切である。	声の感情が工夫され、抑揚が適切につけられている。	子どもの反応を適切に捉えて、主題やストーリー展開に応じて、抑揚や間に変化を与えている。
描写（例話）	例話などのお話が、適切な場面でなされている。	適切な話題を取り上げ、子どもが場面を的確に思い浮かべることができるような具体的な話を展開している。	保育内容や保育目標との関わりで、多様な例話を用意し、保育過程の中に筋道立てて位置づけ、実践している。
発問	発問としてはっきりわかるように話している。	発問の意味がはっきりしていて、答え方がわかりやすい問いになっている。	確かめる問いと考えさせる問いを区別し構成している。
指示	指示の内容がわかるものである。	指示の具体的手順・方法がわかりやすく、実際にやってみせられる。	子どもの自主性を引き出すような指示ができています。
司会	・話し合いに展開させる有意義な問いかけがなされている。 ・すべての子どもが視野に入っている。 ・子どもの発言に傾聴している。	・議論のすれ違いや対立点を明確にしている。 ・子ども全体に目配りをして、多くの子どもが参加できるようにしている。 ・子どもの発言を整理しまとめている。	・子どもから色々な意見が出るように促している。 ・子どもの表情や、それまでの発言の流れを受けて指名している。 ・子どもの発言をまとめ、活かしなが話し合いの流れをつくっている。
応答	あいづち、うなずきなどを伴って、子どもの発言を受けとめている。	子どもの発言の意図や真意を捉えるために、適切な言い換えやゆさぶりを行っている。	子どもの発言の問題点を捉えて適切に切り返しやゆさぶりをを行うとともに、はげましや賞賛などの評価を実行している。
3) 態度 身振り手振り	言語によらないコミュニケーションの大切さを理解し、身振り手振りを交えてのことばがけが大切であることに気づいている。	必要に応じて、身振り手振りを交えたことばがけをしている。	子どもの反応を適切に捉えて効果的な身振り手振りを工夫している。
視線	視線が子どもへきちんと向いている。	個への視線と子ども全体への視線がバランスよくゆきとどいている。	子どもの視線や表情を受けとめ、適切に反応を返している。

観 点 \ 段 階	段 階 1	段 階 2	段 階 3
表情	明るく自然な表情である。	子どもの表情に反応して、自己の表情に変化をつけることができる。	子どもの活動場面によって、自己の表情に変化をつけることができる。
4) 適合性 語彙	易しいことば使いである。	子どもの発達段階や理解度をふまえてことばが選択されたり、言い換えが行われている。	子どもの語彙力をわずかにこえることば使いのレベルをつかみ、子どもの語彙の向上や理解力の高揚に努めている。
表現者として	保育の中で表現者としてふるまう自覚がある。	子どもの発達段階や理解度をつかみ、表現者としてふるまうことができる。	保育場面や題材の特性に応じて、表現力豊かに保育を展開できる。
2. 接し方			
1) 保育場面での教師の位置どり	子どもへのかかわりにおける立ち位置の大切さに気づいている。	子どもへのかかわりとして適切な立ち位置をとろうと努力している。	一定の立ち位置に固執せず、状況に応じて立ち位置を工夫している。
2) 子どもの発言への対応	子どもの発言に対して、注意を払うことができる。	受容的・共感的な態度をもって子どもの発言を受けとめている。	個々の子どもの発言に対して即座に価値判断せず、子どもができるだけ主体的に考えられるように援助する。
3) 突発事故への対応	子どもの予想外の反応、行動等、突発事故に対して、冷静さを保つことができる。	子どもの予想外の反応、行動等、突発事故に対して冷静かつ適切に対処することができる。	子どもの不安、動揺を収め、安全な雰囲気づくりへの対処を行っている。
3. 子どもへの評価活動	子どもの活動から、行動面、心理面でどのような変化が見られたかを評価しようとしている。	子どもの活動を関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解といった様々な観点から評価している。	保育のねらい、保育計画、保育を通して展開された子どもの活動の実際とを対応させた観点に従って評価している。また、子どもの自己評価活動を支援している。
C. 保育評価力			
自己の保育観、保育目標、保育構成、指導法の対象化と保育評価	保育を通して展開された子どもの活動によって、どのような子どもの成長がみられたか、学びの深まりがあったのかについて評価できる。	保育のねらいと子どもの学びにかかわる活動の実際に照らして、ねらいが達成されたか否かについて評価できる。	保育のねらいと子どもの学びにかかわる活動の実際に照らして、ねらいが達成されたか否かについて評価できるとともに、その評価を踏まえて、具体的な改善点を指摘できる。